

琉球大学学術リポジトリ

[書評] 多和田眞一郎(TAWATA Sinichirō)著 『沖縄語音韻の歴史的研究』

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石崎, 博志, Ishizaki, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33992

[書 評]

多和田眞一郎 (TAWATA Sinichirō) 著

『沖繩語音韻の歴史的研究』

溪水社 (広島) 2010年 962頁

石 崎 博 志 (ISHIZAKI Hiroshi)

はじめに

『沖繩語音韻の歴史的研究』(以下「本書」)は沖繩語の音韻史を考察した著作である。分析に用いた資料はハングル資料、漢字資料、アルファベット資料などの外国資料に加え仮名資料、さらに1970年代の現代語資料¹⁾など多岐に亘る。言語資料となりそうなものはほぼ掲げてあると言つてよい。

氏はこれまで『沖繩語漢字資料の研究』をはじめ数多くの著書・論文を残しており、同時に『沖繩語史研究 {資料}』も上梓し、さらに『沖繩語形態の歴史的研究』も出版される予定である。本書は氏が携わってこられた御研究のその集大成とも言える。執筆の動機として、沖繩語の歴史的研究が共時的研究に比して歩みが遅いことにあるとし、著者は自ら本書の意義を以下のように述べる。

沖繩語の歴史的研究に関する、実証的・体系的・総合的な最初の研究書となり(残念ながら、沖繩語に関しては実証的な「通史」と呼べる研究は皆無に等しかった)、その方面での学問的發展の礎となるであろう。大いなる意義があることになる。

1. 本書の体裁

本書はまずその分量に圧倒されるが、その内容について簡単に紹介したい。

「はじめに」では本書で扱う沖繩語を「沖繩島中・南部地域の言葉」と定義したうえで、1960年代から2000年代の沖繩語の変容を「沖繩語川」「日本語河」という比喻で説明する。序章においては分析対象資料一覧を示し、各世紀ごとに資料名と資料年代、そしてハングル資料、漢字資料、仮名資料、アルファベット資料という使用文字による注記を施す。そして、各資料の版本や所載情報を資料の略号とともに整理している。そして、p.6で16世紀、17世紀の琉球語の音価推定のために参照する「古辞書類」として、『中原音韻』(1324)、『東国正韻』(1447-48)、『訓蒙字会』(1527)、『西儒耳目資』(1626)を挙げる。18世紀については、引き続き14世紀の北方方言を表す『中原音韻』と、『朴通事諺解』(1677)、『老乞大諺解』(1795)、Gilesの『華英辞典』(1892)が使われている。これらを参照の上、音訳字の「推定音価」、つまり当該資料が示す沖繩語音の発音が割り出されている。そしてp.7において音訳字や推定音価の示した表の体裁を説明している。

第1章では沖繩語音節の変化について述べる。ここでは文献が存在しない15世紀の沖繩語の音韻体系を示し、それと現代語の変化を併記することで現在に至るまでの変化が示される。そもそも15世紀以前の音韻状況をどのように再構成したのかは明かされていないが、例えば15世紀から現在までの間にカ行子音については/ki/→[tʃi]/ci/と変化したことが示され、「語例」として「きも(肝)」[tʃimu]/cimu/の例が示される。

第II章以降は、各時代の各資料についての具体的な論証に入る。その方法を示すと、本文ではまず「琉球館訳語」などの資料名を提示し、当該資料のなかで特定の沖縄語の音節にどのような音訳字（寄語）が使用されているのかを列挙する。そして、各音訳字について「古辞書類の音」を表で列挙し、それらの発音から得られた当時の沖縄語の「推定音価」を表の右覧に示している。さらに〈用例〉として、各音訳字を含む音訳字全体を提示し、それに同定される沖縄語の語彙を括弧（ ）で示している。本書は一貫してこの形式を基本とし、さらに議論が必要な箇所については説明を加えている。

そして、第VII章「分析の纏めと更なる考究」で各資料における音韻状況をまとめ、変化がいつ発生したのかが説明されている。

2. 本書の問題点

2-1 原資料について

本書の大きな特徴は、他の資料で得られた結果が後の時代の別の資料の結果に適用されていることである。前の時代にキ音の破擦音化の兆候がみられれば、その後の時代の資料で破擦音化の証拠がなくても破擦音化していると解釈されるが如きである。

例えば、p. 868によると /ki/ 音の破擦音化は『おもしろうし』巻2 (1613) に始まり、それ以降は取り扱った全ての資料で破擦音化していることになっている。しかし、p. 462の本覚山碑文 (1624) の /ki/ 音の〈用例〉にはキ音がチ音で表記される例はなく、自らも「破擦音化の例は見当たらない。」と述べ、さらに、田名文書 (1627、1628、1631、1634、1660) では「/ki/ 相当の用例がないので、破擦音化に関しては触れられない」としているのに、p. 891の表では破擦音を示す /cji/ が書き込まれている。/ki/ 音の破擦音化の兆候が当該文献において見られないのに、前の時代の何ら関連性もない資料でそれが合流していることを根拠に破擦音化していると見なすことはできない。そもそも、碑文や田名文書の辞令書は候文、つまり和文で書かれている。候文は書記文体として口語の音韻体系から独立したものである。琉歌の表記のように、和文で書きながら実際には方言で読まれるということも当時はあったかも知れないが、そうした文書に口語の沖縄語が露呈しないのが一般的である。候文の資料は沖縄における文体を論じるならまだしも、音韻体系を論じる資料としては適当ではない。因みにキ音の破擦音化に関しては、「陳侃」から『中山傳信録』までは音訳語に明確な使い分けがされており、確実にキとチの合流が確認できるのは『琉球譯』(1800)である²⁾。

本書は極めて多くの原資料を使っており、その点は感服する。惜しむらくはB. J. ベッテルハイム“*English-Loochooan Dictionary*” (1851) が使用されていないことである。上掲書は本土方言のネ音に対しては ni、ニ音に対しては nyi と明確に使い分けており [伊波和正 1998]、ナ行エ段音の変遷を考える上で不可欠な資料である。この時代に両音が [ni] と [ni] という形で区別されていたことは、その前の時代状況を示す漢語資料の信憑性を疑わせるものである。本書 p. 908の表では1501年の「語音翻訳」「たまおとんのひもん」ではナ行エ段音とナ行イ段音が区別され、ネの音価は /ni/ となっている。だがこの音価の根拠が「語音翻訳」「たまおとんのひもん」の母音を扱った p. 62には説明はなく、子音を説明した p. 346には「注記すべきこともさほど無いので、基本的に、用例に語ってもらうことにする」とあり、事実上の説明はない。なぜ両音が後の時代に子音で区別されているものが、16世紀に母音でなされているのかについても言及はない。このように全体的に説明が不足していることが多い。

2-2 音訳語と琉球語の同定

『使琉球録』所載の「夷語」や「琉球館訳語」など沖縄語を示す漢語資料は漢語（提示語）に対し、音訳字（寄語）が割注で示されるという体裁をとる。本文に漢語として「字」が提示されていれば、その沖縄語の訳語が、文字を表す「ジ」なのか、地名に使う「アザ」なのか、人名要素の「アザナ」なのか、複数の可能性を考える。実際に『琉球入學見聞録』の「字：日」は文字の「ジ」を示しているし、『中山傳信録』の「字：阿三那」は「アザナ」を示している。漢語資料を扱う場合、このように「字」に対してどのような沖縄語の語彙を当てようとしていたかということ音訳語から正確に汲み取らねばならない。この作業は資料分析の初歩であり、これを疎かにして、音訳語が示す沖縄語の音韻を議論することはできない。しかし、本書の〈用例〉には音訳字は書かれているが、その音訳字がどの漢語（提示語）に対して付されているのかが書かれていない。900頁を超える本書で読者は逐一原書で該当項目を探す作業を強いられる。体裁上、こうした不備がある上に、本書は音訳語と沖縄語の同定に問題がある事例が少なくない。

一例を挙げよう。p. 281には /tʃ/ に対する音訳字に“其”が挙げられ、『中原音韻』『西儒耳目資』の発音ではそれぞれ /ki/ と書かれているのに、推定音価は /tʃi/ となっている。元代の大都の言語を記した『中原音韻』では“其”音はまだ k- 音を保っており、また明代の南京官話を示した『西儒耳目資』もまだ /k-/ 音を保っていたとするのが大方の見方である。多和田氏は何を根拠に“其”が /tʃ/ を表すと判断しているのか、〈用例〉をみると「渣冷其（ごうのち、象の血）」とある。夏子陽の原文にあたると、当該項目は“象牙”に対する音訳語として書かれており、漢語“象牙”は「象牙（ゾウゲ）」を指していることは明らかである。同書には“象（ゾウ）：渣”の用例もあることから、ゾウ音は“渣”の音訳字が担っている。また「鬚（ピゲ）：品其」の例にみられるように、“品”のような鼻音韻尾 /-n/ をもつ音訳字に後続する“其”がゲ音に用いた例もある。問題は“冷”である。“冷”は来母（有声歯茎側面接近音 /l-/ と再構される声母）由来字なので沖縄語のラ行音を示す仮名であることが想定されるが、「ゾウゲ」の発音には合わない。一方、他の項目でウ音を示し、かつ後続の子音を有声音化される音訳字の用例をみると、“甘蔗（ウーギ）：翁急”、“飯（ウバン）：翁班尼”などの用例がみえる。よって“翁”と“冷”は字形の近似に因る誤字の可能性が高い。「渣冷其」ではなく「渣翁其」であるとすれば、“象牙”に対し「ゾウゲ」が正しく対応する。こうして音訳字を精査すれば“象牙”対し、「象の血」といった奇妙な訳語を当てずにすむ。

その他、沖縄語 /ubukui/ を表す“謝恩：温卜姑里”を（おんほこり、御誇り）としたり、音訳字は沖縄語 /kubi/ を示しているのに“員領：空為”を（えり、襟）としたり [p. 54]、“員領：員領”のように提示語の衍字であると思われる音訳語を（えり、襟）と解釈したり [p. 60]、“王子：倭奴鬱勃人誇”の“鬱勃人誇”を（おもりこ、思い子）という日本語としても沖縄語としても不可解な解釈が付され、さらに“人”がラ行イ段音を示す音訳語とされている [p. 60]³⁾。このように原本の間違いに基づいた語釈や、音訳語と沖縄語が対応しない例は枚挙に暇がない。沖縄語を記した各漢語資料は本来的に誤字や錯誤が含まれ、未詳語も多い。それらが音韻体系の構築に決定的な役割を果たさない限りは、「未詳」としておくのが賢明である。誤字に基づいた語釈や牽強付会ともいえる解釈をもとに、音韻体系を構築するのは危険である。特に“其”などのキ音を表す音訳字がどのように使われているのかに関しては、慎重に扱う必要がある。それは沖縄語の歴史において、カ行イ段音がいつ破擦音化したのか、漢語資料において音訳字がどの地域の方言を基礎にしているのか考察する徴表となるからである。

2-3 漢語資料の継承性

本書における漢語資料の扱い方には、一定の配慮が必要であったと感じる。漢語資料を沖縄語の資料とする時、最も注意を要するのは資料の継承性である。沖縄語を記した漢語資料は基本的に既存の資料に修正を加えながら編纂される。よって先行資料の間違いも引き継がれることも多い。以下は漢語“葉”に対する音訳字の変遷である。

	陳侃	琉譯	蕭崇業	夏子陽	傳信録	見聞録
葉	尼	尼	尼	尼	豁	なし

漢語“葉”に対し“尼”/ni/という音訳字が当てられるのは、“葉”を沖縄語の「根」と勘違いした音訳者の間違いであるが、それが夏子陽「使録」まで継承された。そして『傳信録』でようやく“豁”/hua/という正しく「葉」を表す語に修正されたのである。この例から分かるように、漢語資料には前の時代の間違いが含まれており、前資料からの引き写しなのか否かを厳密に峻別し、それから各項目の分析を始めなくてはならない。しかし、本書は漢語資料の継承性に何ら配慮されず、こうした問題を回避していない。これでは前時代の古い発音も同時代資料として扱うことになり、実際に音価を推定する際の矛盾が生じてしまう。例えば、p. 513では『中山傳信録』の/pi/に対応する音訳字を考察している。

音訳字	中原音韻	朴通事	老乞大	華英辞典	推定音価
非	fəi	ɕui ⁴⁾	ɕui	fei	ɸi
必	piəi	pi.pi?	pi.pi?	pi	ɸi

このように“非”と“必”の「古辞書類」の声母の発音に大きな、しかも沖縄語のハ行音の考察に極めて重要な違いがあるのに、「推定音価」は同じ発音 ɸi になっている。ちなみに“必”は歴史的にも、あらゆる現代漢語方言に照らしても /p-/ 音には決して読まれない。〈用例〉をみると、“非”は非凡（ひげ、鬚）に、“必”は必周（ひと、人）に当てられることが書かれ、原文を参照すると「鬚：非凡」「琉球人：倭急拿必周」となっている。“鬚”や“琉球人”の音訳語がどのように変遷したかをみると、“鬚”は『傳信録』で“品”から“非”へ、つまり /p-/ 音から /f-/ 音に変更が加えられ、“琉球人”の音訳語は先行資料をそのまま引き写されて /p-/ 音がそのまま残る形となっている。

	夏子陽	蕭崇業	伝信録
鬚	品其	品其	非几
琉球人	倭急拿必周	倭急拿必周	倭急拿必周

このように先行資料を引き写したか、改訂を加えたかで、音価が異なる場合があるのである。『傳信録』編纂当時の音韻状況を知るためには、“琉球人”の項目のようにまるごと引き写した項目は“鬚”のように新たに追加された項目と同等に扱うことはできない。もしも、『傳信録』編纂当時の沖縄語のハ行イ段音を /ɸi/ と推定するなら、“必”のような /p-/ 音としか解釈できない用例が存在する意味を説明する必要はあろう。

2-4 音訳字の基礎方言と古辞書類

本書の音価推定についても注意すべき事柄がある。これは対訳(対音)資料全般にも言えることだが、対訳資料は双方の、あるいはどちらかの言語体系がある程度明らかでなければ、編著者の意図を十分に理解することは難しい。特に漢語と沖縄語の対応関係で、沖縄語の姿を明らかにしたい場合、漢語の音韻体系への理解は不可欠である。その際、a priori に漢語=官話であると措定することはできない。なぜならそれは漢語資料において音訳字を付けた者が必ずしも「官話」音で発音を付けるとは限らず、またその必要もないからである。例えば、丁鋒 [2002、2008]、石崎博志 [2010a] には『中山傳信録』の音訳字(寄語)に徐葆光の母語である呉語の発音が反映されていることや、『琉球入學見聞録』や『琉球譯』の寄語にも官話系統以外の発音で音訳字が付されることが指摘されている⁵⁾。しかし、こうした先行研究は本書では参考にとされておらず、音価推定の参照文献として時代がかけ離れた『中原音韻』や「南京」の「官話」を記した『西儒耳目資』や北京語を反映する『朴通事諺解』『老乞大諺解』、Giles の『華英辞典』が選ばれた意図を明示しないまま使われている。その上、如上の文献に当然含まれている漢字音が表に掲載されず、覧が☆印によって埋められていることも多い⁶⁾。しかも表に漢字音の音価が記入される場合も、それらが必ずしも音価推定に使われない例も多く、特段の説明も欠いているので何を以て音価を割り出したのか理解に苦しむことも多い。例えば、p. 552 の /ka/ に対する音訳字に“他”“搯”などの舌音 /t-/ 系の音訳字が挙げられ、『中原音韻』でそれぞれ /t'o/ や /t'au/ となっているのに、これらは何ら参考にされずに推定音価ではそのまま /ka/ /kɑ/ になっている。また、“介”“街”などは /kia/ や /kiai/ という発音をもとに /kja/ /k(j)a/ と沖縄語の音価が推定されている。しかし、例えば「二日：福子介」「親戚：喂街」で“介”や“街”が /kja/ と推定されていれば、当時の発音は二日 = /フツキヤ/、親戚 = /ウィーキヤ/ と拗音になってしまう。これは沖縄語の歴史と現代語の諸方言をみれば想定しがたい発音である。因みに“介”や“街”は『中山傳信録』初出の音訳字で、これは呉語の発音 /ka/ をもとに付けられているものであり、音訳字の基礎方言を考慮せずに音価を推定することの危険性を示す一例である。

2-5 「並存」あるいは「共存」について

『琉球譯』に反映された言語の性質についてはすでに石崎博志 [2001 pp. 21–22], [2010b pp. 163–166] に言及されている。ここでは『琉球譯』という書物が示す沖縄語の発音は沖縄語であるが、語彙としては候文特有の表現はみられず、漢文訓読特有の表現がよくみられることを指摘し、それは琉球における漢文訓読の学習や作法に由来すると論じられる。一方、本書 [pp. 936–938] には『琉球訳』を以下のように論じる。

「日本語」と「沖縄語」という、まさしく「言語」という位相の違いに起因する「並存」「共存」を現出しているのが、『琉球訳』であると考えられる。(中略) 総じて、[琉訳] に収録されている言葉は「日本語」(所謂「文語文」)である。(中略) これは何に起因するのであろうか。それは、李鼎元に「言語資料」を提供したとされる「首里士族」達の「言語生活」であろう。「読み書き言語」(所謂「書き言葉」)としての「日本語」と「聞き話し言葉」(所謂「話し言葉」)としての「沖縄語」を使用する「二言語併用」(バイリンガル)の生活を送っていたと考えられる。(中略) そのような彼らが、李鼎元に「公式的な言語」、あるいは、「対外的に示せる沖縄の言葉」として提供したものが、[琉訳] に収録されたということであろう。そして、それは結果的に、大部分が「日本語」であったということになる。

『琉球譯』に反映された多くの言語は文語に関係する点は共通している。だが、三母音化傾向を示し、カ行イ段のキが破擦音化してサ行イ段のチに合流しているという沖縄語の特徴を備えた言語を、「日本語」と呼んでもいいのだろうか。和語由来の語彙が使われていることを理由にそれらを「日本語」と呼んでいいのかは、議論が分かれるであろう。本書全般に言えることであるが、用語の使用に際して、誤解を招かぬよう明確な定義を与えておくべきであろう。

おわりに

言語の通時的研究は共時的研究を基礎に成り立つ。各資料の精緻な分析と、その積み重ねが歴史の流れを明らかにするのである。文献をもとに言語を研究するには十分なテキスト・クリティックが必須である。文献の成立過程や構成、時代背景、反映する琉球語のみならず対訳の言語の性質に十分に考慮してはじめて堅実な研究が可能になろう。また、学術研究の基本として先行研究を網羅し、精読する必要があることは言うまでもない。特に漢語資料の研究として、胤森弘氏や丁鋒氏の一連の論考は、内容に対する賛否に関わらず踏まえる必要はあろう。また、現代方言ではどのような発音になっているのかも、確認しなくてはならない。キ音の破擦音化、ハ行音の変遷、オ段、エ段の狭母音化など、琉球語の史的研究にとって極めて魅力的で意欲的なテーマを扱いながら、上記の点で多くの粗漏があるのは遺憾でならない。

注

- 1) 本書の定義する「沖縄語」は本島中南部方言であるが、この1970年代の{現代語}だけは現代首里方言ではなく、宜野湾市赤道方言を参照している。
- 2) 石崎博志(2010)参照。
- 3) そもそも音訳字に続けて記される()内に書かれた語が、提示語の意味なのか、語源なのか、音訳字の仮名書きなのか不明で、これに対する基本的な説明もない。
- 4) ここは中舌母音の /ɔ/ ではなく両唇摩擦音の /β/ であろう。/ɔ/ の記号は pp. 5-6 のハングル転写例に記載なし。
- 5) 丁鋒(2002)、石崎博志(2002, 2010a)参照。
- 6) “打”“答”“尼”“乃”“琴”“可”“敢”“急”などの常用字の音価も書かれていない。Giles の『華英字典』(初版)は13,848字を収録し、常用字はほぼ網羅している。

参考文献

- 胤森弘(1998)『『琉球館訳語』手冊』私家版。
丁鋒(2002)「『中山傳信録』「琉球語」・「字母」の對音解讀」『琉球の方言』第25号、pp. 101-138、東京。
丁鋒(2008)『日漢琉對音與明清官話音研究』中華書局、北京。
石崎博志(2002)「『琉球譯』の基礎音系」『沖繩文化』第92号、pp. 1-24、沖繩。
石崎博志(2010a)「『中山傳信録』の寄語と琉球語について」『日本東洋文化論集』第16号、pp. 39-66、沖繩。
石崎博志(2010b)「琉球における文体の変遷からみた『琉球譯』の言語」『近代東アジアにおける文体の変遷』白帝社、pp. 147-172、東京。
伊波和正(1998)「ベッテルハイム『英琉辞書』: NI, NYI」*Journal of foreign languages, Okinawa International University* 3(1), pp. 307-328、沖繩。

*本稿は編集部への依頼により執筆したことを最後に付け加えておく。

(琉球大学)